

## 「助けてといえた日が、助かった日～命を抱く」

修士2年 田中 知世子

大阪愛隣地区には、全国から「おっちゃん」が集まる。大阪では、ホームレスの人を、親しく「おっちゃん」と呼んでいる。あえて、名前を呼ばないところがある。なぜなら、ここへ来るまでに多くのものを捨てている。互いの本名さえ知らない。聞かない。

介護の仕事をしている私は、この地のおっちゃんたちに「もっと住みやすいアパートもあるし、まともな食事もあるから」と誘ったが、殆どのおっちゃん達は、この地を離れない。理由は様々だが、人との縁が主な理由であるようだった。

ここにいれば安心、自分を受け入れてくれる仲間がいる。昼間から酒を呑み、ホルモンを食べ、少額の博打をする者もいる。

自転車でその街を走れば、「気を付けて行きやー。」と声がかかる。奥田牧師もこの地での熱い思いをされたと話された。声をかけてくれたおっちゃん達の中にもホームレスは多い。

生産性、成果、問題解決、毎日繰り返し使われる言葉だ。

何かに追われ、追いかけて、つまずいて立ち上がれなかったり、立ちすくむ人を置き去りにしてもなお進もうとする。

目的地はどこなのだろう。

「抱僕」という言葉に、胸が詰まる。

条件付きの受け入れや愛、価値があつての承認。

傷ついたとき、抱き留めてくれる人はいるか、また、抱き留めているか。目の前で立ちすくむ命を抱きしめることができるかということに気づかされた。

相対的貧困率にも驚く。アメリカは、金はないが友達はある。日本は金もないが友達もいない。不安定な時代の到来、もう底が抜けていると言われた。

最近の子供の虐待や、殺傷事件を見ていると、決して彼らの問題だけではないのだと思うことが多い。サラリーマン家庭で育った私は、日曜日は漫画サザエさんを見て、家族4人で夕食をし、父は野球のナイターを見て、という生活が一般サラリーマン家庭だと思っていたし、テレビのドラマもそんな感じだった。みんな中流という思い込みだった。

少しずつ多様な生活や生き方を認める社会が育ちつつある中、「みんな一緒」から少しずつ違いの中に立ちすくむ人が出てきた。奥田牧師が言われるように「底が抜けた」社会に急速になっているようだ。コメ袋の小さな穴は、初め一粒のコメがこぼれるだけだが、その穴が大きくなって一気にこぼれ出るような、そんな感がある。

自助の横に公助、互助の横に公助、と手の届くところに「助けて」が言えるように、また、立ちすくむ命を抱く豊かさを教育にと思う。

奥田牧師の講義から、私に力をくれた「おっちゃん」たちの顔が浮かんだ。どの命も精いっぱい生きた命だった。